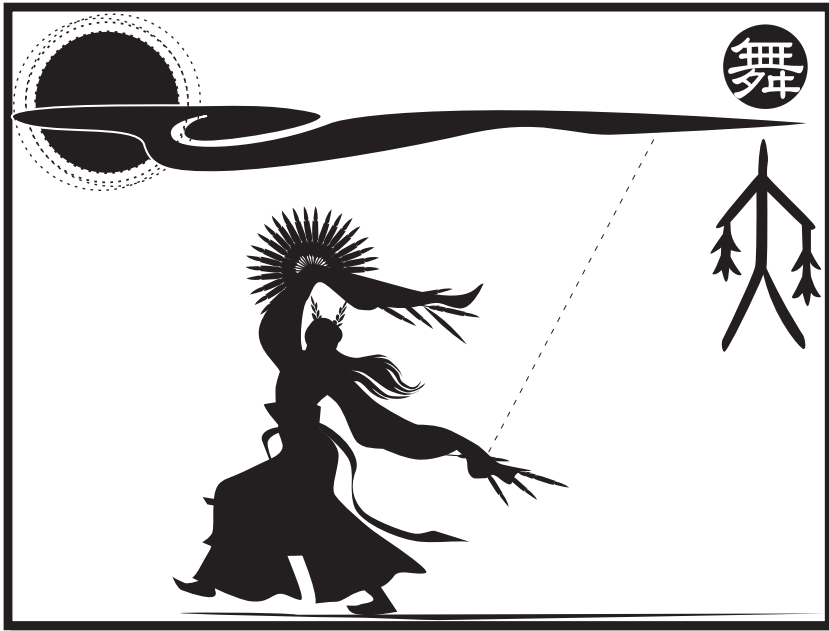


白川静のことば

《24》



金子都美絵・画

歌謡は呪歌よりおこったものであるが、舞楽もまた巫俗よりおこった。舞はもと巫女が行なう雨請いの舞であり、楽はシャーマンが行なう医療の方法である。字形の示すところは、そのまま文字以前の舞楽のありかたを示している。舞を『説文』に「樂なり。足を用て相背く。舛に従ひ、無の聲」と字を形声に解する。舛は両足を左右に開く形で、それが舞いの姿、無はその声符とする解釈であるが、無が舞う姿をあらわす象形字で、のちに舛を加えたのである。舞は雨請いのために行なわれたもので、それを舞雩という。それで雨の下に舞をかく字もある。雩とは、靈星に雨を祀る雨請いの儀礼である。高句麗の俗に靈星を祀ることがみえるが、それには舞雩の形式がとり入れられているのである。古代の巫術のうちでも、ひでりを防ぎ雨を求めることは、作物の豊凶や邑落の生活、人命にも関する重大事であった。殺される王の説話や焚巫の俗なども、みなその事情を伝えるものである。

『中国古代の文化』講談社学術文庫 p192-193)

